

職業実践専門課程の基本情報について

学 校 名		設置認可年月日		校 長 名		所 在 地		
日本分析化学専門学校		昭和57年4月1日		重里 徳太		〒530-0043 大阪市北区天満2丁目1番8号 (電話) 06-6353-0347		
設 置 者 名		設立認可年月日		代 表 者 名		所 在 地		
学校法人重里学園		昭和57年3月31日		重里 國麿		〒530-0043 大阪市北区天満2丁目1番8号 (電話) 06-6353-0347		
目 的	産業界における研究・開発・検査・測定・試験・分析・管理等に必要な知識および技術を有する人材の育成を目的とする。具体的には、各種の固体・液体・気体の基本的な分析法を分析装置を使い把握することを中心に、最近めざましく需要が伸びている新素材（セラミック等）をはじめとする高度化学材料、一般化学材料、製品についての化学分析技術を修得するとともに、環境分析（大気汚染・水質汚濁等）の測定・処理技術の修得をめざす。							
分野	課程名	学科名	修業年限 (昼、夜別)	全課程の修了に必要な総授業時数又は総単位数	専門士の付与	高度専門士の付与		
工業	工業 専門課程	資源分析化学科	2年（昼）	2100単位時間 (又は112単位)	平成6年文部科学 大臣告示第84号	—		
教育課程		講義	演習	実験	実習	実技		
		1260単位時間 (84単位)	単位時間 (又は単位)	840単位時間 (28単位)	単位時間 (又は単位)	単位時間 (又は単位)		
生徒総定員		生徒実員		専任教員数		兼任教員数		総教員数
80人		62人		3人		3人		6人
学期制度		■前期：4月1日から9月30日 ■後期：10月1日から3月31日			成績評価	■成績表 (有)・無) ■成績評価の基準・方法について 本校で行われる試験、並びに実習の成果、学習意欲や取り組み等の履修状況等を総合的に勘案して、学科担当講師が行う。		
長期休み		■春 季：3月21日から4月7日 ■夏 季：8月1日から9月10日 ■冬 季：12月21日から1月7日			卒業・進級条件	各学年修了時において、講義科目、実験・実習科目ごとに規定された以上の単位を取得した上で、出席すべき授業日数及び各講義科目時数のそれぞれ3分の2以上出席していること。		

生徒指導	■クラス担任制 (有)・無) ■長期欠席者への指導等の対応 まずは長期欠席者を出さないために、無連絡欠席があった場合には、その日中に必ず担任から連絡を取り、欠席の理由を確認し、学校と保護者と連携して学生の出席を促している。さらに、担任が直接ご家庭（一人暮らしの学生については下宿先）へ出向き、学生の気持ちを汲み取りながらも、彼らの気持ちが登校につながるような指導を行っている。	課外活動	■課外活動の種類 献血ボランティア、環境活動、各種実験会の参加等、積極的に奨励している。 ■サークル活動 (有)・無) 野球、テニス、サッカー、バスケットボール、環境委員会、図書委員会
就職等の状況	■主な就職先、業界等 環境、電子・電機、金属材料、繊維、医薬品、化粧品、食品、バイオ、医療、臨床など、あらゆる分野の研究、品質検査、品質管理、製造などで分析化学者として従事します。 ■就職率^{※1} 91.2% ■卒業者に占める就職者の割合^{※2} 91.2% ■その他 (任意) (平成25年度卒業者にに関する平成26年5月時点の情報)	主な資格・検定	毒物劇物取扱責任者、化粧品製造業責任技術者、化粧品総括製造販売責任者（以上、卒業時全員無試験取得）、環境計量士、公害防止管理者、危険物取扱者、放射線取扱主任者、中級バイオ技術者認定試験、上級バイオ技術者認定試験、工業英語能力検定、ビジネス能力検定 ほか
中途退学の現状	■中途退学者 2名 ■中退率 3.2% 平成25年4月 1日在学者 62名（平成24年4月入学者を含む） 平成26年3月31日在学者 60名（平成25年3月卒業生を含む） ■中途退学の主な理由 経済状況の悪化、進路変更 ■中退防止のための取組 上記の「長期欠席者への指導等の対応」に加え、定例打合会を行い、担任からクラス学生の現状をペーパーと口頭にて報告することで学生の様々な情報の共有を図っている。また、退学につながるような問題事象があれば、他の専任教員からの情報もここで集約され、解決すべき問題があれば、担任に任せるのではなく、専任教員全体としてその問題解決に取り組んでいる。また、学生間、学校間でのグループウェアの導入を図り、様々な手段でのコミュニケーションを可能にしている。		
ホームページ	URL: http://www.bunseki.ac.jp/		

※1「大学・短期大学・高等専門学校及び専修学校卒業予定者の就職（内定）状況調査」の定義による。

- ①「就職率」については、就職希望者に占める就職者の割合をいい、調査時点における就職者数を就職希望者で除したものとする。
- ②「就職率」における「就職者」とは、正規の職員（1年以上の非正規の職員として就職した者を含む）として最終的に就職した者（企業等から採用通知などが出された者）をいう。
- ③「就職率」における「就職希望者」とは、卒業年度中に就職活動を行い、大学等卒業後速やかに就職することを希望する者をいい、卒業後の進路として「進学」「自営業」「家事手伝い」「留年」「資格取得」などを希望する者は含まない。

※「就職（内定）状況調査」における調査対象の抽出のための母集団となる学生等は、卒業年次に在籍している学生等としている。ただし、卒業の見込みのない者、休学中の者、留学生、聴講生、科目等履修生、研究生及び夜間部、医学科、歯学科、獣医学科、大学院、専攻科、別科の学生は除いている。

※2「学校基本調査」の定義による。

全卒業生数のうち就職者総数の占める割合をいう。

「就職」とは給料、賃金、報酬その他経常的な収入を得る仕事に就くことをいう。自家・自営業に就いた者は含めるが、家事手伝い、臨時的な仕事に就いた者は就職者とはしない（就職したが就職先が不明の者は就職者として扱う。）

1. 教育課程の編成

(教育課程の編成における企業等との連携に関する基本方針)

本校のカリキュラムや到達目標が、実際の企業現場や業界団体等で求められる知識、技術と乖離がないか。また、将来に向けさらに求められる知識、技術は何かを検証するために、本校校長の下に教育編成委員会を設置。年に2回、委員会を開催し、意見を徴集。校長はそれらの意見を参考に、教員会議における集約・審議を経て、カリキュラムの改善等に活用する。さらに、企業等からのアンケートについて別途実施し、本委員会において活用する。

(教育課程編成委員会等の全委員の名簿)

平成26年5月1日現在

名 前	所 属
芝野 祥久	大阪府職業能力開発協会 技能検定課長
本多 達也	DRC株式会社 試験部評価センター 有用試験課／品質保証室 課長
福田 賢司	株式会社サンテクノス 取締役
峯森 章	日東薬品工業株式会社 取締役
山口 敬三	山桂産業株式会社 代表取締役
松本 聡	ツーワイ合成有限会社 代表取締役
重里 徳太	本校校長
佐藤 智子	本校副校長
塚本 昌己	本校専任講師
渡邊 快記	本校専任講師

(開催日時)

第1回 平成26年9月25日 13:00～15:00

第2回 平成27年2月 開催予定

2. 主な実習・演習等

(実習・演習等における企業等との連携に関する基本方針)

分析化学の技術は、それそのものが企業等の機密中枢に関わる技術だけに、入学した学生は、技術として社会で確立していることは理解できているものの、入学前に「見える仕事」として実感する機会ほとんどない。そのため、技術修得への目的意識が習熟しづらい分野と言える。それらの解消と、さらには、最新・基本問わず各企業が重要視している知識、技術の修得を目的とし、連携企業等の協力の下、校内および校外における実習・演習等を実施する。さらには、社会人にとって必要不可欠な人間力や礼儀などを身に付けさせる機会としても重要な位置づけとしている。

科 目 名	科 目 概 要	連 携 企 業 等
分析化学	分析化学の基礎的全分野について、分析法の原理、化学反応、実験装置と操作法と解析法、応用例などを分かり易く説明する。また、公益社団法人大阪労働基準連合会と連携し、校外施設において、分析化学業界で必要とされる特定化学物質および四アルキル鉛等を用いた技能の実演習を通じて実践的かつ専門的な能力を育成する。具体的には、それらの物質からの健康障害及びその予防措置や作業環境の改善方法、保護具に関する知識や技能について学ぶ。また、これらの知識・技術の修得に関する評価についても、同会と連携して行う。	公益社団法人大阪労働基準連合会
機器分析化学実験	現在、化学分析においては機器分析が多用されるため、分析化学者として機器分析の基本が理解できることが必要である。そこで、機器分析化学実験では、機器分析化学Ⅰの講義で学ぶ分析装置を実際に扱い、機器の基本操作、測定手順、試料の前処理、データ解析の実習を行う。また、公益社団法人大阪労働基準連合会と連携し、校外施設において、分析化学業界で必要とされる酸素欠乏や硫化水素作業環境における作業環境での業務を行うための技能の実演習を通じて、実践的かつ専門的な能力を育成する。具体的には、酸素欠乏症・硫化水素中毒及び救急蘇生法に関する知識および蘇生方法実技、酸素欠乏、硫化水素の発生原因及び防止措置や保護具の取り扱い、酸素濃度及び硫化水素濃度の測定実技などについて学ぶ。また、これらの知識・技術の修得に関する評価についても、同会と連携して行う。	公益社団法人大阪労働基準連合会

ビジネス実務 I	分析化学の技術は、それそのものが企業等の機密中枢に関わる技術だけに、入学した学生は、技術として社会で確立していることは理解できているものの、入学前に「見える仕事」として実感する機会はほとんどない。そのため、技術修得への目的意識が習熟しづらい分野と言える。それらの解消と、さらには、最新・基本問わず各企業が重要視している知識、技術の修得を目的とし、連携企業等の協力の下、校内および校外における実習・演習等を実施する。さらには、社会人にとって必要不可欠な人間力や礼儀などを身に付けさせる機会としても重要な位置づけとしている。	株式会社三洋化学研究所、株式会社住化分析センター、株式会社二チノーサービス、株式会社島津製作所、ニプロファーマ株式会社
----------	--	---

3. 教員の研修等

(教員の研修等の基本方針)

研修等は、教員に対して、現在就いている職、または将来就くことが予想される職に係る職務の遂行に必要な知識、技能等を修得させることにより、その職務の遂行に必要な教職員の能力、資質等の向上を図ることを目的とする。

① 化学等専門分野における技術等の実務に関する研修

② 教員としての指導力の修得や向上に資する研修

なお、上記以外の詳細については、別途教員研修規程に定める。

4. 学校関係者評価

(学校関係者評価委員会の全委員の名簿)

平成 26 年 5 月 1 日現在

名 前	所 属
芝野 祥久	分野代表・大阪府職業能力開発協会 技能検定課長
大原 一浩	高校代表・大阪府立成美高等学校 教諭
内田 敬	企業代表・交洋ファインケミカル株式会社 総務部課長
石原 和恵	本校在校生保護者
井上 明典	本校卒業生・アクア環境株式会社 環境技術部部長

(学校関係者評価結果の公表方法)

URL:http://www.bunseki.ac.jp/

5. 情報提供

(情報提供の方法)

URL: http://www.bunseki.ac.jp/

授業科目等の概要

(工業専門課程 資源分析化学科) 平成25年度															
分類			授業科目名	授業科目概要	配当年次・学期	授業 時 数	単 位 数	授業方法			場所		教員		企業等との連携
必修	選択必修	自由選択						講義	演習	実験・実習・実技	校内	校外	専任	兼任	
○			基礎化学	分析化学を学ぶに当たり、高校レベルから復習して、化学の基礎部分を修得することを目的とする。具体的な内容は以下の通り。 1. 濃度計算 2. SI単位 3. 物質の構造粒子と物質質量 4. 化学結合（種類の理解） 5. 物質の状態変化 6. 溶液 7. 化学反応と熱 8. 反応速度と化学平衡 9. 酸と塩基とその反応 10. 酸化・還元反応 11. 企業で使用されている試薬の名称	1前	90	6	○			○		○		
○			基礎数学	計算力の修得、化学分析を行った後のデータ処理に必要な各種基礎的な関数の理解を深めることを目的とする。またデータを図示化するための処理を学ぶ。 1. 一次関数 2. 指数関数 3. 対数関数	1前	30	2	○			○		○		
○			安全衛生	化学実験を行うにあたり、使用試薬・使用機器などの危険性に関する知識は不可欠である。本講義では、実験において何に注意すべきかを講義し、「危険物取扱者」の資格取得に必要な知識の修得を目的とする。 1. 安全衛生概論 2. 物質の燃焼と消火の方法 3. 消防法の概要 4. 危険物の性質	1前	30	2	○			○		○		
○			生活化学	私達の毎日は、実は「化学実験」の連続である。本講では、普段の生活の中から「化学実験」的な現象をいくつか拾い、その原理を学ぶことを主眼とする。この講義を通じて、不足しがちな「化学実験」を補うとともに、「化学の本質」に迫り、「専門家としての基礎」を築く。 1. 有機化学と無機化学 2. 金属 3. 電池の化学 4. 触媒 5. 水 6. エネルギーと化学 7. 洗濯の化学 8. 視覚と色素 9. 味 10. 栄養とアミノ酸、DNA 11. 現代化学の話題	1前	30	2	○			○				○
○			定性分析法	金属イオンの系統的常量定性分析について講義し、第1族～第6族までの分離分析法に利用される理論修得を目的とする。定性分析実験の化学反応を正しく理解し、溶解度積や、共通イオン効果などの基本的な知識を修得する。	1前	30	2	○			○		○		

○			分析化学	分析化学の基礎的全分野について、分析法の原理、化学反応、実験装置と操作法と解析法、応用例などを分かり易く説明する。主な項目は次の通りである。1. 分析試薬・標準物質 2. 溶液の濃度 3. 酸塩基平衡とpH 4. 中和滴定・沈殿滴定 5. 錯体生成と錯滴定 6. 酸化還元平衡・酸化還元滴定 また、公益社団法人大阪労働基準連合会と連携し、校外施設において、分析化学業界で必要とされる特定化学物質および四アルキル鉛等を用いた技能の実演習を通じて実践的かつ専門的な能力を育成する。具体的には、それらの物質からの健康障害及びその予防措置や作業環境の改善方法、保護具に関する知識や技能について学ぶ。また、これらの知識・技術の修得に関する評価についても、同会と連携して行う。	1 通	60	4	○	△	△	○	○	○	○	○
○			機器分析化学 I	分光分析法、クロマトグラフィーなどについて理解を深め、実際の実験を行うための基礎力を養うことを目的とする。汎用機器の測定原理・構造・試料の前処理・データ解析法等について理解を促すと共に、機器分析が比較分析であることを理解させる。	1 通	60	4	○			○		○		
○			ビジネス実務 I	分析化学の技術は、それそのものが企業等の機密中枢に関わる技術だけに、入学した学生は、技術として社会で確立していることは理解できているものの、入学前に「見える仕事」として実感する機会はほとんどない。そのため、技術修得への目的意識が習熟しづらい分野と言える。それらの解消と、さらには、最新・基本問わず各企業が重要視している知識、技術の修得を目的とし、連携企業等の協力の下、校内および校外における実習・演習等を実施する。さらには、社会人にとって必要不可欠な人間力や礼儀などを身に付けさせる機会としても重要な位置づけとしている。	1 通	60	4	○	△	△	○	○	○	○	○
○			工業英語(化学)	科学技術に関して記述する言語は英語が世界標準となっている。また様々な機器・装置を扱う上でも、英語での表記がなされている。したがって、将来的には専門的な科学英語を用いて、読み、書く能力が必要不可欠となる。具体的には文部科学省後援工業英検4級取得対策、分析機器に関する用語解説を行う。 さらに資本や労働力の国境を越えた移動が活発化するとともに、貿易や海外への投資が増大することによって世界における経済的な結びつきが深まるグローバル化が一般的になっている。それとともに、就職活動における採用試験で、英語を出題する企業も多くなってきている。したがって、採用試験対策も行っていきたい。	1 通	60	4	○			○		○		

○		基礎物理	物理における項目の中で、理系学生の就職採用試験に出題される内容ならびに分析化学者として使用する分析機器の電気回路の基礎的内容を理解する。 1. 速度と加速度 2. 等速直線運動 3. 落下運動 4. 運動の法則(第1～第3) 5. 電気と電気抵抗 6. 電流と磁気など	1 後	30	2	○			○	○				
○		有機化学	有機化学の中で基礎となる有機化合物の分類法を学んだ後、有機化合物の性質を決める官能基の種類と性質、飽和・不飽和炭化水素について理解する。また、公益社団法人大阪労働基準連合会と連携し、校外施設において、分析化学業界で必要とされる有機溶剤を用いた技能の実演習を通じて実践的かつ専門的な能力を育成する。具体的には、有機溶剤による身体的な被害防止の指揮・監督、また、労働安全衛生上の労働者の衛生の確保への配慮や消防上の危険物の取扱いに関する知識や技能について学ぶ。また、これらの知識・技術の修得に関する評価についても、同会と連携して行う。	1 後	60	4	○	△	△	○	○	○	○	○	○
○		無機化学	「基礎化学」で学んだことを基礎として、無機化学に関する各論を講義する。はじめに原子の電子構造と電子配置、周期性などについて学び、その知識を利用して典型元素や遷移元素についての各論を学ぶ。 1. 原子の構造と電子配置 2. 化学結合 3. 1族・2族元素 4. 12族～18族元素 5. 遷移元素	1 後	30	2	○			○	○				
○		生物化学	生物を構成している物質の性質とその役割について解説していく。特に、糖質、脂質、タンパク質を中心に基礎から講義を行う。なお、本講義はバイオ技術者認定試験対策も目的とする。	1 後	30	2	○			○	○				
○		定量分析法	化学分析の基本操作である重量分析・容量分析について、実験で得られたデータの取扱いや、測定値から分析目的成分の量・濃度を算出するための計算演習を主に行う。 1. 重量分析：鉄の定量 2. 容量分析：沈殿滴定、中和滴定、酸化還元滴定、キレート滴定など	1 後	30	2	○			○	○				
○		データ解析法	客観的なデータ処理方法を修得するため、記述統計と推測統計に関する基礎的知識を学習する。 1. 代表値、散布度 2. 確率分布（正規分布、t分布） 3. 区間推定 4. 仮説検定 など	1 後	30	2	○			○	○				

○		基礎化学実験	化学実験に必要な容量計・器具・天秤等の取り扱いや基本操作について、経験を積むとともに、正しい測定方法・データの扱い方(誤差、未知濃度、モル濃度・規定度、百分率)を理解し、報告書の作成方法を修得する。また、試薬の特性を理解し、廃液処理、実験ゴミ処理等ができ、実験室でのルールを身につけ、分析化学者としての基礎的な技術の修得を目的とする。 1. 安全教育 2. 器具の取り扱い 3. 中和滴定(化学的滴定法) 4. クロマトグラフィー 5. 細菌学的検査 6. アセチルサリチル酸の合成・定量 7. 基礎実験手法の確認テスト	1 前	90	3			○	○		○		
○		定性分析実験	金属イオンの系統的定性分析を行う。第1族～第6族までの分離分析法について、理論および実技の修得を目的とする。これらの定性分析実験を通し、化学反応を正しく理解する。 技能検定(化学分析)の試験の際にも、定性の試験が課題として課せられているため、この実験中においても未知試料の検出の実技試験を行う(ただし、第1族～第3族まで)。	1 前	90	3			○	○		○	○	
○		機器分析化学実験	現在、化学分析においては機器分析が多用されるため、分析化学者として機器分析の基本が理解できることが必要である。そこで、機器分析化学実験では、機器分析化学Iの講義で学ぶ分析装置を実際に扱い、機器の基本操作、測定手順、試料の前処理、データ解析の実習を行う。 また、公益社団法人大阪労働基準連合会と連携し、校外施設において、分析化学業界で必要とされる酸素欠乏や硫化水素作業環境における作業環境での業務を行うための技能の実演習を通じて、実践的かつ専門的な能力を育成する。具体的には、酸素欠乏症・硫化水素中毒及び救急蘇生法に関する知識および蘇生方法実技、酸素欠乏、硫化水素の発生原因及び防止措置や保護具の取り扱い、酸素濃度及び硫化水素濃度の測定実技などについて学ぶ。また、これらの知識・技術の修得に関する評価についても、同会と連携して行う。	1 後	90	3		△	○	○	○	○	○	○
○		定量分析実験	化学分析の基本操作である重量分析・容量分析の実験方法について、理論と実践に沿った精度の高い技術を修得する。化学分析(技能検定)の試験の際にも、定量分析の試験が課題として課せられており、この実験中においても未知試料の定量の実技試験を行う。 1. 重量分析：鉄の定量 2. 容量分析：中和滴定、酸化還元滴定、キレート滴定 3. 実技試験	1 後	90	3			○	○		○	○	

○		品質管理	本講義の目的は科学的な品質管理の基となっている統計的品質管理の基本的考え方を理解できるようになる事である。現在多くの企業において品質管理の基本を理解している人材は不足しており、基本的考え方を理解している学生は就職にも有利である。品質管理に伴う基礎的な考え方から、具体的な計算や道具（グラフ）の使い方を学び、品質管理検定3級の試験対策も目的としている。	2 前	30	2	○		○	○				
○		化学関係法規	本校卒業と同時に取得可能な国家資格「毒物劇物取扱責任者」を規定する毒物劇物取締法について、その法の体系や化学物質の毒性及び試験方法、毒物・劇物の取扱い方と事故時の対応などについて理解を深め、毒物劇物取扱責任者に必要とされる知識を修得する。	2 前	30	2	○		○		○			
○		機器分析化学Ⅱ	機器分析化学Ⅰでの学習を基に、分析の根幹をなす下記の分析機器について概要、原理、応用を理解する。 1. 核磁気共鳴分析 2. 質量分析 (MS) 3. 蛍光X線分析 (XRF) 4. X線回折測定 (XRD) 5. 電子顕微鏡 (EM)	2 前	30	2	○		○				○	
○		環境化学	前半は、環境問題を学ぶ上で土台となる定義・歴史的背景などの基礎知識と環境ビジネスの社会的動向、後半は、水質環境問題の現状・メカニズム・有害物質を含む処理方法等を講義する。また、環境問題と化学物質の関係を深く理解させること、公害防止管理者（水質関係）資格の取得も目的とする。 1. 環境とは 2. 環境問題の遷移と特徴 3. 環境問題への対策 4. 循環型社会・環境産業論 5. 製品アセスメント 6. 公害総論 7. 水質概論 8. 汚水処理特論 9. 水質有害物質特論 10. 大規模水質特論	2 前	30	2	○		○		○			
○		バイオマテリアル概論	現在から未来に向けて、すべての化学の分野に携わる者として、「バイオ」を冠したサイエンス・ケミストリーを避けて通ることはできない。この科目では、植物から微生物、さらにはそれらの代謝物由来の材料までの、広い意味での「バイオマテリアル」を取り扱って、これから身近になりつつある「バイオ」についての知識を深めることを目的とする。	2 前	30	2	○		○		○			
○		化学分析法	分析化学実務の基礎となる概念を中心に、分析法の原理、特徴、操作法、応用例などを解説する。以下の項目について、例題や演習問題を通じて修得する。	2 通	60	4	○		○				○	

○		ビジネス実務Ⅱ	分析化学の技術は、それそのものが企業等の機密中核に関わる技術だけに、「見える仕事」として実感する機会は少ない。そのため、技術修得への目的意識が習熟しづらい分野と言える。それらの解消と、さらには、最新・基本問わず各企業が重要視している知識、技術の修得を目的とし、連携企業等の協力の下、校内および校外における実習・演習等をビジネス実務Ⅰに引き続き実施する。さらには、社会人となるまでに必要なコミュニケーション力や一般常識を身に付け、自らの考えを表現し、相手に伝えることを学習する。	2 通	60	4	○	△	△	○	○	○	○	○
○		物理化学	反応熱の温度や圧力との関係、化学平衡、気体や溶液の性質を通じて、様々な物理的現象のエネルギー変化について理解する。化学反応や物質の状態によるエネルギー変化に着目し、それを数値化して定量的に把握する能力を身につける。	2 通	60	4	○			○			○	
○		材料分析化学	材料全般に共通する基本的な特性や挙動について習得し、その上で、今使われている材料（鉄鋼、非鉄金属など）の中身（組成・構造）を学び、これから実社会で出会う分析対象としての材料とその分析方法に関する知識を身に付ける。 1. 金属元素と結晶 2. 状態図と相 3. 熱処理と変態 4. 鉄鋼材料 5. 非鉄金属材料 6. 材料試験および材料分析（SEM、EPM、XRFなど）	2 通	60	4	○			○			○	
○		環境分析化学Ⅰ（水質・土壌）	水質や土壌の化学分析の現場を想定し、試料の採取・保存から前処理・測定まで、理論と実践を総合した力量を身につけることを重視して、JISによる分析法を中心に授業を進める。化学の基礎的理解が、実際の分析を行う上でいかに大切かを学んでほしい。	2 通	60	4	○			○			○	
○		公定分析法	国内外の規格について、その制定目的や内容を習得し、分析方法の規格を読み解く力をつける。また、制定・改廃される法律とそれに用いられている分析方法を勉強して、今後の実務での活かし方について学ぶ。 1. 公定分析法とは、標準化、規格とは 2. 日本工業規格（JIS）、水質、環境、材料関係 3. 日本農林規格（JAS）、食品関係 4. 日本薬局方、医薬品関係 5. 国際規格、ISO、Codexなど	2 後	30	2	○			○			○	

○		先端材料	21世紀で最も重要であるエレクトロニクス分野をはじめとして、各方面で用いられている材料について学ぶ。たとえば、今話題のLED照明や太陽光発電を理解するためには、本講で学習する「半導体」の知識が不可欠である。また、本講の半年で、卒業後の皆さんの「仕事」の一端が見えるはずである。 1. 材料とは何か 2. 電気を通す物質、通さない物質 3. 半導体とトランジスタ 4. ディスプレイ・表示の材料 5. 光通信と材料 6. 磁石 7. エネルギーと材料 8. 表面が活躍する材料 9. 光触媒 10. セラミックス生体材料 11. 「ナノ」とは何なの 12. 環境と材料 13. 資源とは 14. トピックス（最近話題の材料）	2 後	30	2	○			○		○
○		分析機器実務	2年生前期までに学んだ分析機器の理論や使い方をもとに、使用方法だけでなく、分析機器のメンテナンスやトラブルシューティングについて学び、社会に出てから即戦力として活躍できる応用力を養う。 1. 機器の精度管理（分析精度・異常値） 2. 分光光度計のハードウェアと特性 3. 原子吸光光度計のハードウェアと特性 4. クロマトグラムのハードウェアと特性など	2 後	30	2	○			○		○
○		環境管理・監査	企業においてISO14001規格に基づく環境マネジメントシステムを構築し、運用するための事項について概説し、そのなかでも分析業務と特に関連の深い「環境側面と環境影響」および「監視及び測定」に焦点をあてて説明する。	2 後	30	2	○			○		○
○		環境分析化学Ⅱ（大気・悪臭）	前半は、人の嗅覚の特徴や疾患、悪臭問題の歴史やその行政施策を解説し、パネルの選定や臭気指数測定などの臭気判定士業務に必要な基本的事項を講義する。後半は、大気に関する燃焼計算、ばいじん・粉じん測定、有害物質処理・測定技術などについて講義を行う。臭気判定士資格・公害防止管理者（大気関係）の資格取得も目的とする。 1. 嗅覚概論 2. 悪臭防止行政 3. 臭気指数測定 4. 大気総論 5. 大気特論 6. ばいじん・粉じん特論 7. 大気有害物特論	2 後	30	2	○			○		○

○		環境分析化学 実験	環境分析において、水質分析・大気分析・ 土壌分析を取り上げ、実験を行う。環境分 析は公定法により種々の測定方法が規定さ れている。本実験では次の項目について実 験を行い、環境分析の基礎技術を修得す る。 1. COD (CODMn・ウインクラーアジ化ナ トリウム変法) 2. アンモニウムイオン (インドフェノール吸光度法) 3. アル ミニウム (ルモガリオン法) 4. 全リ ン (モリブデン青吸光度法) 5. 溶存 酸素 6. 大気分析 (窒素酸化物分析法) 7. 土壌分析 (原子吸光法)	2 前	120	4				○	○		○	○
○		材料分析化学 実験	JISに基づいた公定分析法によりステン レス、ガラス、はんだなどの原料物質中の 主成分・微量成分について定量分析する。 本実験では、次の項目について材料 (素 材) の分析を行う。	2 前	120	4				○	○		○	
○		卒業研究	各実験で得た知識および技能の総まとめ実 験。これまでの実験では、準備された実験 項目に基づき実験を進めてきたが、卒業研 究では各自で実験テーマを設定し、そして どのように実験を進めていくかについて検 討、実験を行う。 卒業研究発表会要旨および卒業論文の提 出、卒業研究発表会の内容を審査の上、単 位を認定する。将来企業において、独自で 実験が進められるように実践的なトレー ニングを行う。	2 後	240	8				○	○	○	○	○
合計			37 科目		2100	単位時間 (	112	単位)						

卒業要件及び履修方法		授業期間等	
(卒業要件) 2年修了時において、講義科目76単位、実験・実習科目28単位以上修得し た上で、出席すべき授業日数及び各講義科目時数のそれぞれ3分の2以上出席 している事。 (履修方法) 成績評価の上、合格となった教科目については、単位を付与し単位の認定とす る。成績評価は以下の通り行い、100点を満点とし、50点以上を合格、4 9点以下を不合格とする。 ○成績評価について 本校で行われる試験、並びに実習の成果、学習意欲や取り組み等の履修状況 等を総合的に勘案して、学科担当講師が行う。		1学年の学期区分	2期
		1学期の授業期間	15週

(留意事項)

- 1 一の授業科目について、講義、演習、実験、実習又は実技のうち二以上の方法の併用により行う場合
については、主たる方法について○を付し、その他の方法について△を付すこと。
- 2 企業等との連携については、実施要項の3(3)の要件に該当する授業科目について○を付すこと。